

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第45回

イメージ解釈学の隠蔽に西欧二十世紀文化史の犯罪を摘発する

—ジョルジュ・ディディ=ユベルマン著『残存するイメージ アビ・ヴァールブルクによる美術史と幽霊たちの時間』を読む

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター、
総合研究大学院大学)

0. 『残存するイメージ アビ・ヴァールブルクによる美術史と幽霊たちの時間』。題名からして、いったい何の本だろう、と首を傾げるむきもあろう。著者アビ・ヴァールブルク(1866-1929)の人となりについては、E.H.ゴンブリッチの『アビ・ヴァールブルク伝 ある知的生涯』(鈴木杜幾子訳、晶文社、1986)に譲ろう。また本書の著者、ジョルジュ・ディディ=ユベルマン(1953-)についても、本訳書の訳者あとがきに詳しい。不思議な題名と、本書の内容に関しては、別途書評で解説する手はずなので、重複を厭って略す。著者が、論ずる対象であるヴァールブルクと6月13日という誕生日を共有している事実が訳者解説に触れていることだけを確認するととどめよう。そのうえで、本稿では、問題の核心に極力限定して、現時点での評者による覚書を提供したい。

本書の意義を三点に要約しよう。

1. 本書はまず、従来の美術史学が、イメージの生態に肉薄するうえで、役に立つ道具であるどころか、場合によってはそれを阻害する障害であったことを、明確に訴えた。

2. 次に本書はいわゆる構造主義革命以

降の理論的革命と美術史学との関係を転倒させた。

3. 第三に本書は以上の検証から、二十世紀の学問的知・学問の精神史の書き直しのための指針を示した。以下各々を敷衍したうえて、

4. その前提に立って可能な提案をいくつか記しておきたい。

5. 最後に翻訳に残る問題を、あくまで訳者の苦心には敬意を払いつつ、評者が気付いた範囲で指摘しておきたい。

昇華あるいは抑圧

1-1. ハンブルクの有力なユダヤ系銀行家の倅アビ・ヴァールブルクが、家督を弟に譲る代わりに得た資金をもとに「文化科学図書館」を設立したことは、広く知られる。設立者の死後ほどなく、ナチの台頭しともない、図書館はロンドンに亡命する。この図書館の恩恵を得て画期的な著作をなした人には、『象徴形式の哲学』のエルネスト・カッシーラー、アイコノロジーを確立したエルヴィン・パノフスキー、さらにロンドンに移転したウォーバーク研究所(と通常英語風(邦訳題は『芸術と幻影』だが、これは明らかな誤訳)と呼ばれる)の所長とな

り、『藝術と錯視』あるいは一般向きの『美術の歴史』などで著名なエルネスト・ゴンブリッチ（本人は終生ドイツ風に“ヒ”に近い発音を好まれた）などがある。

これら3名は、いずれもナチの権力掌握にともなって国外脱出を余儀なくされ、後半生の英語圏での著述に費やし、知の『大変貌』（スチュワート・ヒューズ）をもたらした二十世紀の知の巨人の一群をなす。

1-1-1. カッシーラーは、設立者が精神病を病んで不在の図書館に赴くや、その特異な書籍の配置を寸時に理解し、クロイツベルクの療養所で入院中のヴァールブルクに面会するや、病人が求めていた引用をその場で次々に暗唱してみせる天才振りを発揮して、病人に回復の糸口を与えた、という（一読、あまりに出来すぎの印象を禁じえぬ）逸話を残す。北米に移ってイエール大学で教鞭を取ったカッシーラーは「象徴」を鍵言葉に、英語圏の美学を刷新した。

1-1-2. またプリンストン大学の美術史教授となったパノフスキーは『視覚芸術の意味』ほかの著作で、造形芸術を理解する手法として三段階の方法論を展開した。それを、造形対象を記述する次元、その対象の主題を分析する次元、そしてそれらを統御する時代の価値観を解釈する次元、と要約しても、さして乱暴でなないだろう。一般にパノフスキーはヴァールブルクが完成できなかった方法論を完成に導いた人物として評価されてきた。

1-1-3. さらにゴンブリッチは、ほかならぬアビ・ヴァールブルクについて、敬意を込めた浩瀚な知的伝記を上梓している。ナチズムの迫害を避けて同じくイギリスに亡命した隣人、分析と反証を武器とした科学哲学者カール・ポパーとも親密な友人だったゴンブリッチは、パノフスキーの提唱にも、そこに世界観照 Weltanschauung の形而上学、ヘーゲル的な「時代精神」の残滓を感じてこれを嫌い、距離を取った。その主著『藝術と錯視』は、実験心理学の手法を取り入れて、視覚体験の脳生理学の検討を試みた著作といつてよい。

したままで残した業績は、これら次世代の亡命者たちによって完成され、それが戦後の（少なくとも英語圏における）美学や美術史学の主流を成した、との理解がなされてきた。だが近年にいたってこうした評定に対して異議申し立てが成されるに至った。ディディ・ユベルマンの著作は、それをもっとも鮮烈に代表する。彼によれば、ヴァールブルクのもっとも重要な学問的貢献は、ことごとく、これら著名な後継者によって放擲されてしまった。それはいわば英語圏への越境に伴う関税障壁のようなものだった。それだけでなく、著者はそこに学問的慎重さというよりむしろ、臆病さ、哲学的怠惰（97）〔（ ）内は邦訳頁数〕を指弾せずにはいない。その詳細の当否は、逐一原文に即してご判断載きたいが、それを図式化してみよう。

1-2-1. まずヴァールブルクがルネサンスに見出した「古代の残存」あるいは「死後の生」Nachleben は、パノフスキーによって「遺産の復活」に衣替えさせられる。

1-2-2. 神話的形象には「情念定型」Pathosformel が認められるとするヴァールブルクの主張は、カッシーラーの手で哲学史に組み込まれ、「象徴機能」に置き換えられてしまう。

1-2-3. さらにヴァールブルクが形象のうちに、造形を司る心理の「症候・症状」symptômeを認め、病理学的な「症候解釈学」を模索したのに対し、ゴンブリッチはこれを破棄して、その代わりに科学的な体裁の「視覚心理学」を提唱し、造形における情念の次元を見事に厄介払いしてしまう。

ディディ・ユベルマンの大作は、第1部「幽霊としてのイメージ」第2部「情念としてのイメージ」第3部「症状としてのイメージ」と題されている。これが、概ね上記の批判に呼応していることは明らかだろう。ではこの置換によって何が犠牲とされたのか。

幽霊の脅威と悪魔払い

1-3-1. まず「死後の生」Nachlebenが

形態の生命と死後の「生き残り」survivalance現象、すなわちヴァールブルク自身の比喩を用いるなら「幽霊」による憑依を問題にしていることに注意しよう。ヴァールブルクの「生き残り」は、定義からして変質と差異を含んでいた。だがパノフスキーはこの形態の生死という不可逆な次元を切り捨て、これを起源と影響という機械論的・算術的な授受関係に還元し、もっぱら形態がいかなる言語的な「意味作用」の乗り物であったかの解明に、自らの学問的使命を限定してしまう。だからこそアイコンロジーは、言語的な意味づけを越えた形態の奔放な振舞いからは眼を背け、結果的には形態の非言語的次元を矮小化し、文献学的探求の傾向を顕著にする。こうして造形のなかに「読解すべき謎」を見出すパノフスキーのアイコンロジーは「身振り、葛藤、蛇を奪われた《ラオコーン》を描写するようなもの」(189)だ、と著者は批判する。ヴァールブルクが追究したのは、「読解すべき謎」ではなく、《ラオコーン》の造形の中に閉じ込められた「エネルギー論的象徴性」(191)の振舞いではなかったか。

1-3-2. ふたつめに「情念定型」から「象徴機能」への横滑りだが、カッシーラーをいささか弁護するならば、彼の大きな関心が『主体概念から機能概念へ』(1910)という思想上の大変貌に注がれていた事実を捨象するのは酷だろう。前著を踏まえた『象徴形式の哲学』(1923-9)の第1巻「言語」第2巻「神話」の考察要素とし、ヴァールブルク図書館の資料は決定的な働きをしたが、著作の構成からも明らかなように、言語の統制を離れた神話のイメージ的な要素は、カッシーラーの体系では占めるべき位置がない。そのうえで、ディディ=ユベルマンも正当に主張するとおり、第3巻「認識」に見える「象徴の懐胎」symbolische Prägnanzが問題となる(480)。そこで哲学者は「感覚的なものが意味を包括し、それを意識に対して無媒介的に現前させることが可能になるような関係」について述べる。ここには「象徴形式」の前-言語的次元に遡

る、象徴の成立契機の謎に触れる糸口が、ぼっかりと傷口をあけ、カッシーラーの整然とした言語-認識哲学体系にあって、ほとんど唯一の裂け目をなしている。だが哲学者はその隙間に踏み込みはせず、可能性は手付かずで放置された。それがこの浩瀚な大団の原文に接した読者の実感だろう。

この著書の刊行に前後した時期、ヴァールブルクへの注目すべき弔辞で、カッシーラーは「人間存在の表現=表情形態」Ausdrucksformen と的確な表現を用いているが(209)、それをプラトン流の「永続する」ewig イデアに引き付け、またそれを、作品に内在して形態を生起せしめるエネルギーではなく、あくまで「作品の背後」hinter den Werkenにある不変の形式と見なすという、いわば裏切り行為を、無意識に犯している。「情念」が「呪縛によって凝固され」(211)て封じ込められた状態としてヴァールブルクが捉えた「定型」Formelのディオニソス的な受肉の含みと、カッシーラーにおけるエイドスとしての「形式」のアポロンの明晰さとの落差は、もはや決定的というほかあるまい。前者の見出した不気味なるものDas unheimlicheを後者は「脱-不気味化」した(468)。なお、著者はカッシーラーが結局ヴァールブルクの意図を「裏切」っていることは認めているが、翻訳にあるように「軽蔑」méprisしているとは言っていない(468)。méprisは「取り違え」で、この部分の邦訳は、手練の訳者のうっかりした「取り違い」だろう。

1-3-3. さて、カッシーラーが「象徴の懐胎」に触れたのが「失語症」という象徴の機能不全を扱っていた箇所だったのは、偶然ではあるまい。なぜならここから第3に問題とすべき「症状としてのイメージ」という問題圏が開けるからだ。そしてここに至って、我々はヴァールブルクの営みを、正確に同時代のジークムント・フロイトによる精神分析の理論彫琢と平行して捉える必要へと導かれる。そして「文化の症候学」(196)にヴァールブルクの企ての核心を見る著者の立場は、これとは対照的に、ヴァ

ールブルクを極力フロイトから切り離そうとするゴンブリッチとは、ここで決裂する(194, 207, 288)。

ちなみに、邦訳は模範的に明晰な仕事だが、著者がゴンブリッチとの対立を決然と表明する箇所に、例外的に不鮮明な訳が目立つのは偶然だろうか。かたやフロイトの有名な「原初語における意味の相反」は、ヴァールブルクの唱える「両価性」や「脱両極化された極性」の典型例を示している。にもかかわらず *alors même que*、「ヴァールブルクはフロイトをほぼ知らなかった、などとゴンブリックが言い張るのは、むなしき彌縫というものだろう *a beau dire*」(拙訳:訳書194頁に相当)と著者の反駁は鮮明。また、ヴァールブルクが精神病理学的なパラダイムに頼っていることを説明しようとする段で、ゴンブリッチはフロイトの代わりに「ティート・ヴィニョーリのように独創的だが晦冥な進化論者を担ぎ出し *aller chercher* してきたが、それではあまりに不十分」(拙訳:訳書296頁に相当。「担ぎ出し」が「招聘しにいて」となっているが、これでは意味不明だろう)。ここにはゴンブリッチによる「認識論的検閲」つまりヴァールブルクの認識からフロイトを抹消しようとする作為一に対する著者の明快な異論があったはずだ。

フロイトが精神病の発症のうちに無意識の働きを探ったのと同様に、ヴァールブルクもまた、造形的形象のうちに、潜在する力動性と、その発現としての発症すなわち危機 *Krise* を見て取った(172)。藝術作品が取る「形態」とはそこに働いた相克する力の戯れによって引きちぎられた「裁ち布」が晒す残骸の傷跡に等しい(115)。ヴァールブルク晩年(1929年)の覚書には「欲動的な自己喪失」*Triebhafte Selbst-entäusserung* と、意識的な統御による「形態形成」*formale Gestaltung* (281) との表裏に創造行為を位置づける一節が見える(281)。形をなさぬ欲動が、加工と変形あるいは圧縮・置換を蒙りつつ夢に発現する。それは『夢判断』以来、フロイトが解明したところだ。同様の昇華作業は形態を形成するが、そのひとつ

の現れが造形藝術という「症候」をなす。その直後にヴァールブルクは「事前に刻印された表情価値に直面することは、藝術家にとっての決定的な危機」であると語る。これは直接には古代の記憶痕跡を宿した遺産としての「情念定型」の回帰と、それに直面したルネサンス期の藝術家に発生した「症候」を語った一節だ。だがそれが精神病の発症の事例と密接な平行関係を示していることは明らかだろう。すなわち記憶の事後的 *nachträglich* (349) な回帰=外傷 *Trauma* が、ここで直ちに連想させる。

二十世紀精神史における幽霊の回帰

2. ここにはヴァールブルクとフロイトの理論的彫琢の平行性、いやむしろ相互共鳴というべき様相が露呈する。だがさらに大切なのは、ヴァールブルクその人の業績が、あたかも報われぬまま忘却の淵に沈んだ怨霊の再来よろしく、トラウマの姿に変貌して、ティディ・ユベルマンの著作に回帰していることだ。フロイトは欲動の検閲と抑圧による隠蔽、さらにその事後的な回帰という心的過程を描き上げた。それをなぞるような軌跡を、ヴァールブルクの後継者たちは、文化史の水準で反復して演じたにも等しい。これは単にヴァールブルクの症例がフロイトの理論に例証を提供している、というにはとどまらない。むしろ文化の継承に内在する秘められた抑圧機構がここに浮上して、ヨーロッパの知性史の見直しを要求している。そこには三つの局面を区別する必要がある。

2-1. まず、ヴァールブルクの事例は、1960年代末のいわゆる構造主義革命まで主流をなしていた学問的潮流、今の文脈ならばカッシーラー、パノフスキー、ゴンブリッチの名前に代表される営みが、いかなる抑圧の産物だったのかを暴きだす指標となる。

2-2. だがさらにいままで常識とされてきた構造主義の影響に関する定説も再吟味を要求される。すなわち、フランス語圏でいえば、ソシール言語学、マルクス主義、

さらにフロイトの精神分析を三種の神器とし、ラカン、レヴィ=ストロース、バルト、フーコーを四天王とする方法論的の革命が周囲に波及した。その結果として、旧態依然たる状況にあった美術史学も刷新された、とする図式が、例えば日本やアングロ・アメリカの先端好みの学会などでは横行してきた。もちろんフランスにおける実証主義の主流美術史学の牙城が、記号論に代表される方法論的刷新をひたすら白眼視し、現在にいたるまで無視に等しい態度を決め込んで生存していることは、確認しておく必要がある。しかしそのうえで、ディディ=ユベルマンの見取り図に従うならば、構造主義の成果に関する理論畑の常識にも盲点のあることが判明する。というのも、構造主義の時代を過ぎた今になってみると、なかに、すでに構造主義の一端を担う精神分析を内在的に含み、深化させうる探求が

ヴァールブルクの提唱した「文化科学」の胚胎されていたことになるからだ。

2-3. そのことは、さらにヴァールブルクという亡霊の再来によって、構造主義の限界が暴露される、という事態をも示している。要するに、構造主義以降の理論的の革命が美術史研究を刷新したのではなく、むしろ美術史研究がヴァールブルクにおいて抑圧したものにこそ、構造主義を含む言語論偏重の知的エピステーメの営みの限界を探り当てることができる。そこに本書の眼目もある。イメージの潜勢力を探求することから、構造主義になお色濃かった言語=論理中心主義を脱却する根源性ある提案が浮上してくる。(以下次号)

* ジョルジュ・ディディ=ユベルマン『残存するイメージ：アビ・ヴァールブルクによる美術史と幽霊たちの時間』(竹内孝宏・小野千衣訳、人文書院、2005年12月20日発行)